

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：22501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19095

研究課題名（和文）精神科のトラウマケアを向上するICTを用いた教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an educational program utilizing ICT to enhance trauma care in psychiatry

研究代表者

加藤 隆子 (Kato, Ryuko)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師

研究者番号：00794736

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の精神科領域の課題となっているトラウマケアについて、援助職者の実践能力を向上するために、ICTを用いた教育・支援プログラムを開発、実施した。トラウマ体験のある人と関わる援助職者の体験や教育・支援のニーズ調査、トラウマのある人の体験から、援助職者に対してどのような教育・支援が必要か明らかにした。その結果から、1)トラウマの基本的知識とケア、2)二次性外傷性ストレスとその予防、3)感情活用能力向上のための教育、という内容で動画を構成した。研究対象者は全体的にトラウマの知識が深まり、トラウマ体験のある人への関わりに向けて意欲が高まるといった肯定的な変化がみられていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の社会的な問題となっている虐待は深刻なトラウマ体験となり、健全な心身の発達に影響を及ぼすことがわかってきている。トラウマへの適切な支援が行われなければ、本人のみならず社会的損失は大きい。このようなトラウマ体験者への支援は困難であり、いまだ開発途上であった。本研究で開発したトラウマケアに関わる教育・支援プログラムは、援助職者が知識を獲得し関わり姿勢について考え、実践を振り返る機会となっていた。本研究成果は、援助職者が当事者に効果的な支援を行うために貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed and implemented an educational and support program utilizing ICT to enhance the practical skills of assisting professionals in trauma care, which is a challenge in the field of psychiatry in Japan. Through surveys of the experiences, educational needs, and support needs of assisting professionals who interact with individuals with trauma experiences, as well as insights from the experiences of individuals with trauma, we clarified what kind of education and support is necessary for assisting professionals. As a result, we structured videos around the following themes: 1) Basic knowledge and care of trauma, 2) Secondary traumatic stress and its prevention, and 3) Education for improving emotion regulation skills. Overall, the participants showed positive changes, with deepened knowledge of trauma and increased motivation to engage with individuals who have experienced trauma.

研究分野：精神看護

キーワード：トラウマケア 精神科 教育・支援プログラム ICT

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

トラウマの原因には、災害、事故、虐待、暴力のほか、明らかに生命の危険を伴う出来事ではなくても子どもからの逆境体験など、様々な状況があり¹⁾、トラウマは個人にとって耐え難い体験の記憶として残る。トラウマの原因の一つ、児童虐待は年々増加の一途をたどり、日本の社会的な問題となっている。虐待は深刻なトラウマ体験となり、健全な心身の発達に影響を及ぼすことがわかっており²⁾、トラウマへの適切な支援が行われなければ、本人のみならず社会的損失は大きい。

トラウマケアの研究は2000年以降大きく飛躍し、心理・社会福祉の領域ではトラウマフォーカス認知行動療法（TF-CBT）³⁾や「トラウマへの気づき」、「安全性の重視」、「コントロール感の回復」、「ストレングスに基づくアプローチ」を鍵概念としたトラウマインフォームドケア⁴⁾、すなわち、トラウマを熟知したケアの普及が進んでいる。しかし、トラウマインフォームドケアは米国から来た概念であり、日本の医療現場でトラウマ体験者と関わる看護職を中心とした援助職者へは、緒に就いたばかりであり、実践につながっているとはいえない。また、精神科医療の現場であっても、トラウマを体験したことが推測される患者と出会ってもそれに気づかないか、避けてしまう現状がある⁵⁾。援助職者が患者のトラウマを扱うことに困難を抱えており適切な支援が行われていない場合には、患者の精神症状や生きにくさは改善せず、入退院を繰り返しているということが推察される。さらに、トラウマを熟知した支援を行わないと再トラウマ体験となること、援助職者自身も二次的トラウマ体験⁶⁾となるといわれている。以上のことからトラウマケアにおける実践能力を向上するための教育・支援プログラムを開発することは急務である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、トラウマ体験者を支援する援助職者の感情や思考、行動、援助への姿勢、そしてそれらに影響している要因、教育ニーズや課題を明らかにすること、トラウマ体験者はどのような支援ニーズを持っているのかを明らかにすること、援助職者への教育・支援プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1) トラウマ体験のある人と関わる保健医療福祉職者の体験と教育・支援のニーズ調査

精神科病院2施設の精神科病棟に勤務する看護師8名を対象に半構造インタビューを行い、質的帰納的に分析した。インタビューではトラウマにより生きにくさを抱えた患者への看護支援での体験を、その時の感情や思考、行動を中心に語ってもらった。インタビュー内容は、逐語録に起こし、研究目的と関連のあるデータを意味内容が損なわれないよう抜き出しコード化、カテゴリー化した。カテゴリー間の関連を検討し、援助職者の体験を明らかにした。

精神科に関連した4施設の保健医療福祉職者10名を対象に、半構造インタビューを行い質的帰納的に分析した。インタビューではトラウマにより生きにくさを抱えている利用者への支援経験について、印象に残っている場面をとりあげ、その時の感情や思考、行動、配慮していたこと、職種独自の役割を語ってもらった。インタビュー内容は、逐語録に起こし、研究目的と関連のあるデータを意味内容が損なわれないよう抜き出しコード化、カテゴリー化した。カテゴリー間の関連を検討し、援助職者の体験を明らかにした。

(2) トラウマにより生きにくさを抱えた人の体験と支援ニーズ調査

地域で生活しながらトラウマにより生きにくさを抱えた人を支援する団体や精神障害をもちながら地域生活を支援する団体や施設に対象者を募集した。2つの団体施設から5名の協力が得られた。インタビューでは、トラウマ体験やどのようなことが助けになったのかなどを中心に語ってもらった。インタビュー内容は、逐語録に起こし、研究目的と関連のあるデータを意味内容が損なわれないよう抜き出しコード化、カテゴリー化した。カテゴリー間の関連を検討し、当事者の体験を明らかにした。

(3) 教育・支援プログラムの作成と実施

前述の研究結果から、どのようなことが教育・支援プログラムの内容として必要なのか検討を行い、動画配信した。動画は①トラウマの基本的知識とケア、②二次的外傷性ストレスとその予防、③感情活用能力向上のための教育についてであった。1回60～30分程度で、3つのプログラムで構成した。教育・支援プログラムの動画の視聴前後に、内容の理解度を確認するためにWEBアンケート調査を実施した。上記のプログラム内容の理解等に関する選択回答式25項目（回答形式4件法）で質問し、各項目には自由記載にて具体的な回答理由を求めた。25項目は単純集計、自由記述の内容は質的に分析した。

4. 研究成果

(1) トラウマ体験のある人と関わる保健医療福祉職者の体験と教育・支援のニーズ調査

第一段階として、精神科看護師がトラウマにより生きにくさを抱えている患者への看護支援

でどのような体験をしているのか、看護支援に影響している要因は何かを明らかにして、看護支援のニーズや課題を検討した。精神科看護師は、患者支援の困難感やトラウマに触れることへの戸惑いを感じながらも、患者の現在の問題に着目し支援をしていた。トラウマを意識した看護支援には患者の対人関係特性、看護師の安定性、トラウマと対峙することが許される環境が影響しており、トラウマの問題を回避する看護支援の停滞とトラウマのある患者を気にかける看護支援の発展というパターンの特徴があった。看護支援において、トラウマを意識した看護経験の少なさや自信のなさから、患者との関わりを回避するという課題があった。それらを解決するためには基本的なトラウマの知識や感情活用についての教育、退院後の支援を見通し支援者や関係機関と早期から連携する必要性が示唆された。

第二段階として、地域で生活しているトラウマにより生きにくさを抱えている利用者への支援経験のある援助職者の体験を明らかにし、課題や教育・支援ニーズを検討した。援助職者は、現在の苦悩の改善に向けた支援や日々の生活を当たり前を送り日常を積み重ねることを意識した支援を行っていた。そのような支援のなかで、トラウマの問題を扱うことへの恐れや不安といった困難感を抱いていた。しかし、援助職者は利用者の生育歴からくる生きにくさを知り、利用者への理解の深まりと支援の姿勢の変容を体験していた。さらに、援助職者の自己理解に基づいた支援、適度な距離感を保った支援を行うことで関係性の深化と触れ合うことへの手応えを得ながら、利用者のトラウマからの回復を意識した支援を行っていた。そして、これらの支援を支える基盤となっていたことは利用者主体の関係性づくり、安全で安心な環境を提供、職種の専門性に根ざす協働であった。本研究から、利用者の背景を理解することは効果的な支援の姿勢につながる事が分かった。しかしながら援助職者は支援への困難感を抱いており、トラウマの知識に関する事、援助職者の自己理解を深めるための教育・支援プログラムを検討するとともにスーパービジョンの活用や仲間同士の支え合いや連携の必要性が明らかになった。

(2) トラウマにより生きにくさを抱えた人の体験と支援ニーズ調査

トラウマにより生きにくさを抱えながら地域で生活している人の体験と回復に影響を与える要因を明らかにし、支援ニーズを検討した。不安定な教育環境の中で自尊感情が育まれなかったこと、援助希求行動が困難であったこと、自分を守るための対処行動をしていたこと、生活環境が整い、人に受け入れられる体験などを通して視野の広がりを体験していた。公衆衛生的な視点をもってトラウマの知識やケアについて普及していくこと、生活環境を整えること、感情表出を助け、当事者が自身のニーズに気づくことができる働きかけが必要である。

(3) 教育・支援プログラムの作成と実施

①トラウマの基本的知識とケア、②二次性外傷性ストレスとその予防、③感情活用能力向上のための教育、という内容で動画を構成し、動画配信した。アンケートやインタビューの結果、研究対象者は全体的にトラウマの知識が深まり、トラウマ体験のある人への関わりに向けて意欲が高まるといった肯定的な変化がみられていた。今後の展望は、本教育・支援プログラムを更に実践へのイメージがつきやすいよう改良し、普及していくことである。

引用文献

- 1) 西大輔, 白田健太郎, 白川美也子 (2016) : トラウマへの理解とアプローチ、子ども期の逆境体験に焦点を当てて、臨床心理学, 17 (3), 329-332.
- 2) 友田明美 (2016) : 特集子どもの虐待とケア 被虐待者の脳科学研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 57 (5), 719-729.
- 3) Cohen, J.A., Mannarino, A.P. (2015) : Trauma-Focused Cognitive Behavioral Therapy for Traumatized Children and Families, Child Adolesc Psychiatr Clin N Am, 24(3). 557-570.
- 4) SAMHSA (2014) (2020年6月20日検索) : SAMHSAのトラウマ概念とトラウマインフォームドアプローチのための手引き SAMHSAのトラウマと司法に関する戦略構想 2014.7. <http://www.j-hits.org/child/pdf/5samhsa.pdf#zoom=100>.
- 5) 松本和紀 (2016) : 社会と暮らしのなかのトラウマを考える 東日本大震災を経て (解説), トラウマテック・ストレス, 14(2), 99-110.
- 6) Figley, C. R. (1995) : 第1章 共感疲労 ケアの代償についての新しい理解に向けて, Stamm, B. H. (編) / 小西聖子, 金田ユリ子 訳 (2003) : 二次的外傷性ストレス 臨床家, 研究者, 教育者のためのセルフケアの問題, 3-22, 東京, 誠心書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 加藤隆子, 渡辺尚子, 渡辺純一	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 トラウマにより生きにくさを抱えた人のサポートグループに関わる臨床傾聴士の体験	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ヒューマンケア研究	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆子, 渡辺純一, 渡辺尚子, 齋藤直美	4. 巻 36
2. 論文標題 トラウマにより生きにくさを抱えた利用者を地域で支援する援助者の支援プロセスと体験の変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 73 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 隆子、齋藤 直美、渡辺 純一、渡辺 尚子	4. 巻 29
2. 論文標題 トラウマにより生きにくさを抱えた患者への精神科看護師の看護支援と影響要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 19 ~ 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20719/japmhn.20-019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤隆子, 渡辺純一, 渡辺尚子
2. 発表標題 トラウマケアを向上するICTを用いた教育・支援プログラムの開発と実施 教育・支援プログラムの動画視聴前後の参加者の変化
3. 学会等名 第34回日本精神保健看護学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺尚子、渡辺純一
2. 発表標題 トラウマにより生きにくさを抱えた人の回復に影響を与える要因と支援ニーズ
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺尚子、渡辺純一
2. 発表標題 トラウマにより生きにくさを抱えた方のサポートに関わる支援者の体験 臨床傾聴士の体験に着目して
3. 学会等名 第36回日本保健医療行動科学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺尚子、渡辺純一
2. 発表標題 家族関係の葛藤の中で生き抜いてきたEさんのライフストーリー
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺純一、渡辺尚子、齋藤直美
2. 発表標題 トラウマにより生きにくさを抱えている方を支援するピアサポーターの体験
3. 学会等名 第31回日本精神保健看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺尚子、渡辺純一
2. 発表標題 幼少期からの逆境体験を生き抜いた方の自分らしさを獲得する過程
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺純一、渡辺尚子、齋藤直美
2. 発表標題 トラウマにより生きにくさを抱えた方を地域で支援する精神科訪問看護師の体験
3. 学会等名 第30回日本精神保健看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤隆子、渡辺純一、渡辺尚子、齋藤直美
2. 発表標題 トラウマにより生きにくさを抱えた人を地域で支援する 援助者の体験と教育支援ニーズ
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------